

月例研究会（2009年10月28日）

60年安保闘争における 抗議のテクノロジー

ニック・カプア

本報告は、60年安保闘争で行われたデモのやり方を「抗議のテクノロジー」として考察した。とりわけ「国民会議」、「国会請願デモ」、「スネーク・ダンス」という3つの「抗議のテクノロジー」を例として挙げ、新しいデモのやり方の誕生というよりも、むしろ50年代に発明された独特なデモスタイルの終焉であったというほうが適切な解釈であると論じた。なぜ「抗議のテクノロジー」という用語を使うのかというと、「技術」というよりも「テクノロジー」という言葉のほうが、この抗議のやり方が反復のプロセスで開発され徐々に改善されたことを表現出来るからである。

まず「国民会議」というテクノロジーを検討した。60年安保闘争のほとんどは、合わせて134の団体が加盟した「安保条約改定阻止国民会議」という全国的な統括組織の指導で行われた。この「国民会議」は、非常によく似た組織つまり1958年「警察職務執行法改正案」に反対した「警職法改悪阻止国民会議」から、直接的なインスピレーションを受けた。同様に、この58年の国民会議は、「反基地闘争」、「反破防法闘争」、特に「反動評闘争」で組み立てられた地域的・県民的な「共闘会議」からインスピレーションを受けた。60年安保までには、この「国民会議」は、わずかに数日以内に何百万人を全国的に動員出来る頂点にまでも達してきたが、その直後、構成組織の分裂と新左翼からの批判で、効果的なテクノロジーとして舞台から

消された。要するに50年代のテクノロジーとして見られるべきである。

次に「国会請願デモ」というテクノロジーを考察した。60年5月に清水幾太郎という社会学者が雑誌『世界』で、皆自分の言葉で書いた個人的な請願を国会に持ち、一人一人連続に議員に提出するというデモのやり方を勧めた。このエッセイを挙げて、ある学者はこのデモのやり方は60年安保で新たに発明された戦略であったと主張するが、50年代の資料を見ると、このやり方はそんなに新しかったとは言えないことが分かってくる。60年安保以前、少なくとも8つの「国会請願デモ」というデモが初めて都学連、後に全学連で行われた。50年代を通じて、様々な闘争を経て、このテクノロジーとその理論が徐々に開発され、結局清水や国民会議に引き継がれたのである。しかし60年安保以降、「国会請願デモ」はより「現代的」とされる「署名請願運動」によって影が薄れていった。

最後に、いわゆる「スネーク・ダンス」（別名：ジグザグデモ）という60年安保で世界中に有名になった抗議のテクノロジーを挙げた。このデモの蛇行のような動きと「わっしょい」などのかけごえから、どこかの伝統的な祭りに由来したという仮説はたまに挙げられ、そういう可能性はあるかもしれないが、裏付ける証拠はまだ見つからない。最初に言及されるスネーク・ダンスの実行は、Mark Gaynというアメリカ人の記者の日記に出てくる46年の食糧メーデーで行われたことである。これを初めとして、スネーク・ダンスは50年代にますます史料に出ることから見て、先端のテクノロジーとして普及したようである。60年安保では、史上空前の大規模なスネーク・ダンスが行われたが、それ以降、交通条例・裁判判決などで禁止されるようになった。

(Nick Kapur ハーバード大学歴史学部博士課程、
法政大学大原社会問題研究所客員研究員)